



Raindrop

makana

迷子になった片割れ。



寒い冬を耐え忍んで

雪も溶けて

ピンク色の花が咲き誇って

散る瞬間までも魅了して

フワリとフンワリと

浮かれ足になる春

それでいて、新しい生命の始まりのような躍動感溢れる季節。

変わらずに毎年やってくる。

そんな季節の少し前

あなたは、わたしから去りました。

わたしは、涙が枯れるのではないかというくらいに、泣きました。

それでも、無くなることはない涙が、あなたを思い出すたびに流れます。

あなたが居ない、毎日が辛すぎて、哀しくて、どうしようもなくなって

仕方がないので、わたしは感情に、殻を創りました。

自分の周りを殻で包んでしまいました。

何もかも、受け入れない、閉ざして、外の楽しさも、嬉しさも、明るさも、全部、全部、要らない。

そう、思えたからです。

そして、私は季節とは逆送するかのよう、殻の中で深い、深い眠りにつこうと、

冬眠するかのよう、眠ることにしたのです。

そんな、ある日の朝、朝刊と一緒にソレは入っていました。

ポストの中のソレをとるために、もう一度、私は手を伸ばしました。

表書きには、私の名前が書かれ、送り主のところには、名前もなければ、郵便の消印もなく

ただ、わたしの名前だけ。

『 あかりへ』

と、それだけ書かれた、白い封筒。

わたしはソレを開くことにしました。



どうってことのない、普通の封筒だった。

宛名も、ポストに入っていて、わたしの名前なら、問題ない。

普通に、ペーパーナイフを使って、サクッと開封する。

中には、一枚の便箋が入っていて

『 外に出る。』

そして、わたしが何者か、探し出せ。

ヒント

近くにいるようで、遠い存在。』

ただ、それだけ。

何よ、イタズラか何かなのかと、わたしは、すこしだけ、イラッとした感情が心に沸いたことに

気がついた。

わたしは殻を作ったはずだったのに、案外脆い衝撃で、ひび割れる殻だったらしい。

だって、こんな些細なイタズラでさえ、感情を出してしまっているのだから。

「・・・・・・・・ばかばかしい。」

テーブルの上に、その手紙を置いて、カーテンを開けて、ついでに窓も開ける。

朝の眩しい光が、部屋中にチクチクするほど射しこんでくる。

-----今日は天気良さそうだ、 そんなふう to 思っていたら

丁度、洗濯が終わったと知らせる音。

その瞬間、また日常の忙しい朝に戻る。

洗濯物を青空の下で自分なりのこだわりの配置で並び干し終えたときに、スッキリする。

私は、家事のなかで、一番好きなものは、何かと聞かれたら、迷わず洗濯と答えるだろう。

簡単な作業だ。

洗濯物をポンと放り込んで、お気に入りの香りの洗剤をいれ、スイッチを押す。

後は勝手に作業してくれるから。そして、終わった頃には、お知らせ音で知らせてくれるから。

よく考えたら、私が好きなのは、洗濯ではないのかも知れない。

洗濯をするための、洗濯機のスイッチを押すことが好きなのだ。

干し終えた、洗濯物が、風に吹かれているのを横目で見ながら、ベランダからリビングに入るために

サンダルをぬぐ。

フと足の爪に視線が落ちる。

そこには、蜜柑色の、柑橘系の香りが広がっていくような色をした爪が、主張する。

日に焼けていない私の足のつま先に小さな蜜柑がのっかっているみたいだ。

白い、フローリングの床をぺたぺたと歩きながら、爪の色をもう一度確かめて

なんとなく満足する。

クローゼットから、ネイビー色のワンピースを

取り出し、今来ている服を脱いで、それに袖を通す。

化粧ポーチから、一本の口紅を取り出して、軽く唇にのせて、馴染ませるように、軽く唇の上下を

滑らせる。

パッと口を開くと、そこには、綺麗な唇が出来上がる。

鏡の中に映る自分。

髪の毛を整えるながら、

「・・・・・・・・うん、大丈夫。」

その言葉を独り言のように声に出してみる。

その瞬間、スイッチが切り替わるように、私は、よそ行きの私に変化する。

『外に出る。
そして、わたしが何者か、探し出せ。』

ヒント、

近くにいるようで、遠い存在。』

さっきの短い手紙をぼんやりと思い出して、

そんなの、言われなくても、毎日通勤して、仕事して、時間が来れば、帰ってくるから、外には出ている。

それに、わたしを探せと言われても・・・・・・・・、

一体、何だって言うのだろう。

時計を見ると、時間を推していることに、少しだけ、気持ちを急かす。

それよりも、今は遅刻しないために外に出ないと・・・・・・・・

玄関に置いてある、鍵を手にとって、玄関の扉を開けた。



コンクリートの階段を下りて、アスファルトの地面に踏み出す。

まばらに歩いている人の中に、風景のように、私も溶け出すように歩く。

最寄のバス停まで歩く距離は、短くもなく長くもない。そんな風を感じ取れる距離。

その間にあるお店は、コンビニが一軒と、たまに覗く小さな花屋。

バス停に着くと、この時間帯の待つ人の中に私も混ざる。

大体、同じ時間に乗る人の顔ぶれがわかってくるのは、通い慣れてきた証拠みたいなもの。

別にこれといって、挨拶するわけでもなく、出会いがあるわけでもなく、ただ、その時間だけ

バスを待つという時間を共有する人たち。

それぞれの朝。

それぞれの時間。

24時間のうちのほんの一瞬だけ出会う人たち。

さっきの手紙の内容を思い出していた。

この中に、さっきの手紙の送り主がいるのではないかと、おもったが、

どうやら、違うらしい。

———私の近くで遠い存在。

一理、あっているような気もするが、気にならないと思えば、消えてしまう。

そう考えると、なんとなく違う気がする。

多分、ここにいる人達は、だれもが他人には無関心だ。

そんなことを考えていたら、

珍しく時間通りに今日はバスが来て、慌てて乗り込む人の中に私も混ざり混む。

ブザーが鳴ると同時に、ドアが閉まり、

バスの手すりに手をかけて、窓の景色に目をやると、

ゆっくりと動き出す。

少しだけ混んでいるバスの中は、酸素が薄いような気がしてくる。

そんなとき、私の頭には、「ドナドナ」の唄の歌詞が流れ込んでくる。

昼下がりではないが、荷馬車でもないが、ユラユラと揺られて、向かう感じはある意味同じ気がしていた。

そんな気持ちで、ユラユラと揺られながら、会社近くの停留所に降り立つ。

子牛が売られていくかのような気持ちで荷馬車で最後に到着したときに、どんな気持ちかは

聞かなくてもわかるように、わたしの気持ちもそれとさほど変わらないもの、いや、似ている気がした。

『お前は、俺がいなくても、ひとりで生きていけるよ。俺の代わりなんて幾らでもいるからさ。

．．．．．でも、コイツには俺が側にいないと駄目なんだよ。』

-----ああ、こんなときに思い出すなんて。

私から去っていくときの、なにかの安っぽいドラマの台詞のひとつを覚えていたかのような

別れる時は、それを言わなきゃならないみたいなかんじで、私に捨てて言った言葉。

その言葉が重い気持ちになって、押し掛かってくるかのようにウンザリしてくる。

「わたしは、可哀想な子牛ちゃんか!？」

.....なんて心で突っ込みを入れたくなる。

まったく、なんで、今日の朝はこんなにも気持ちが沈むのか、

バスの中でイメージしてしまったものがいけなかったのか、

それとも、こんなふうには考えているのは、今朝のあの手紙のせいだ。

一步、会社の玄関に足を踏み入れる前に深く息を吸い込む。

-----ああ、

私はただ、毎日を暮らすだけの力があればいいと思っていたはずなのに・・・・・・・・。

私は、またややこしく面倒臭い考えをしている。

-----これも、要らない感情のひとつじゃないの。

頭が痛くなってきたような気がして思わずこめかみを指でグッと押してみる。

「----どうしたの？頭痛？」

後ろから、声がして、私は咄嗟に振り返った。



「-----大丈夫？」

首をかしげて、そこに可愛らしいフワフワとした可愛くて、見ているだけで、幸せになれそうな

顔をした同僚の志保が笑ってた。

黙って彼女の顔を穴が開くくらいに見ていたことに不審に思ったのか、

「ねえ？あかり？大丈夫？」

二度目の問いかけに、

私にたずねているのだと気がついて、我にかえる。

「・・・・・・・・あっ、うん・・・・・・・・なんだか、痛いような気がする？みたいな？」

「何それ、あかりってば、なんで疑問系なの～面白い。」とクスクスそれは可愛らしく笑うのだ。

彼女が笑うと、そこに花が咲いたみたいに、空気が優しいものになる気がした。

きっと、こういう女性が、男性に受けて、可愛くて守りたくて、俺が側に居ないと駄

目なんだ的な

感じを与えて、男性の心を驚嘆みにしているのだろうと思う。

きっと、

あの人が選んだ女性も、こんな感じの女性に違いないと、彼女をみて思う。

「鎮痛剤、持ってるから、渡しとく？」

そう言っている最中から、彼女は、鞆の中から、探し出して、私の手のひらに

有無も言わず、ポトリと落とす。

「……………ありがとう。」

ニッコリ笑うと、彼女は、満足したようで、自分の話をはなし始める。

結婚が決まった彼女は、幸せの絶頂の中にいるに違いないと傍から見てもよくわかる。

そんな人が、あんな手紙を私にくれるはずがない。

あの手紙の主は、彼女ではない。

聞くまでも、確かめるまでもない。

いま自分の幸せに駆け上がっていくことで一生懸命になっているのに、

他人の不幸せなことに足を突っ込んでいるくらいに暇ではないはずだ。

それに、私が、あの人に捨てられたことさえも、私がそんな人が居たことさえも

知らないだろう。

ほら、今も笑顔からポロポロと、幸せが零れ落ちてくるかのようだ。

その幸せの粒を、受け取れば私も少しは今の状況から抜け出すことが出来るのかも

知れないと、在りもしないモノに頼りたくなるほど私の心は弱くなってきているのかも知れない。

(. 参ったな。)

そんな風に思ってしまったからなのか、本当に、鈍い感じの痛みがしてきた気がして、

貰ったものを飲むことにした。

「あっ、私、薬飲んでから行くから、先行ってて。」

「うん、わかった。」

ヒラヒラと手を振って、先に彼女は歩いてくのを見て、

その方向とは逆にある自販機がある場所に向かうために、私は背を向ける。

喫煙室の部屋を通り過ぎて、すぐその横に設置してある自販機の前、

財布から、小銭を出して、投入する。

迷わず、ミネラルウォーターのボタンを押す。

ガタンと落ちてくる音。

取り出し口から、取り出して、その場でキャップを捻る。

今、私の手のひらにのっかっている小さな白い粒を、幸せの粒に見立てるかのよう

口に放り込んで、ミネラルウォーターで流し込む。

喉から通っていく冷たい水に押されて、ジワリジワリと溶け出して、その粒の効き目

が

内から効いてくる頃には私は少しは幸せになっていればいいのにと、

もう一口、ミネラルウォーターを流し入れる。

振り返った瞬間、ドンとぶつかった。



「あっ、すみません。」

今日は、よく振り返ると誰かに遭遇するもんだと思って、誰にぶつかったんだと顔を見ると、

人懐っこい小犬のような顔をした、後輩の平沢が

「せんぱーい、ひどいっすよ！」

なんてことを言ってるし。

「……………あっ、ごめん。」

「先輩、ぶつかったの俺じゃなかったら大変ですよ!？」

「えっ、何で？」

彼のジャケットに、色が濃い部分は、どうみても、私の手元に持っているモノが原因だとわかる。

「うわっ!ごめん。」

「いいっすよ。」

慌てて、ハンカチを探して、彼の濡れた部分を拭く。

ほんとに今日の私はどうかしてる。

きっと、朝のあの手紙が心にずっと引っ掛かっているから。

「どうしよう!？」

「だから、大丈夫ですって。」

ハンカチを持っていた手を不意に捕まれて、どうしたかと思い、彼の顔を見上げた。

「・・・・・・・・先輩、大丈夫ですか？」

「へっ？」

「薬、飲んでたんでしょ？」

「あっ、うん。」

「ほんと、目が離せないから困るよ。」

「・・・・・・・・はい？」

「いや、何でもありません。それより、今日の資料のことなんですけど・・・・・・・・」

彼は、何事も無かったように、仕事の話に摩り替えて、私達は、そのまま移動する。

よく、考えてみると、彼は、営業に本当に向いていると思う。

相手に負担にならないように、上手い具合に気を使わせないように、サラリと会話を変えたり、

手を貸して欲しいときには、いつも、いいタイミングで現れて、手助けしてくれる。

私を知るこの会社の後輩の中で、一番だと思う。

・・・・・・・・そういえば、あのときも-----

朝出てくるときに、鏡に映る自分を見て、落胆した。

目が泣きすぎて、腫れぼったくて、いっその事、今日くらいは会社をズル休みしてしまっても

よかったのに、丁度、年度末決算時期で、どうしても処理しないといけないものを抱えていた私は

無理に出社した。

いくらかは、化粧で誤魔化したとはいえ、さすがに腫れぼったい目だけは、少し冷やさないと

いけないかなと思ってはいた。

「先輩、朝のコーヒータイムつきあってくださいよ。」

「・・・・・・・・ええっ？」

「はい、おごりますから、・・・・・・・・時間も、まだ大丈夫そうですし。」

腕時計で時間を確認して、腕を引っ張って行かれた自販機の前。

ゴトンと落ちた、コールドのコーヒーと、ホットコーヒーの二本を私にくれる。

「・・・・・・・・えっと？」

人差し指で私の目の辺りを指して、

「冷たいの、冷やして？あったかいのは、飲んで。これ俺のおごりっす。」

そして、にいて笑った顔が、よく出来たでしょ？って顔でボールを投げて持ってきた犬のようだと

思えて、私は笑った。

プルタブを開けて、温かい方のコーヒーを飲む。

「先輩、何かあったんですか？・・・えっと、」

「ああ、この目ね？うつ伏せて寝たから。」

そんな嘘だとバレバレなことだとわかっているのに、必要以上に驚いていた。

「今だけでもいいですから、少しは冷やした方がいいかと思いますよ？」

「あっ、うん。ありがとう。」

腫れぼったい熱っぽい瞼の上に、ヒンヤリとした冷たさが気持ちよかったけれど、

なんだか可笑しな感じなんだろうなと思いながらも、あんまり気にならなかったのは、彼の

持っている雰囲気だからなのか・・・・・・・・。

・・・・・・・・あれ？

ちょっと、まって。

あの手紙の

近くて遠い存在。

-----ていう部分、なんだか彼に当てはまるような気がする。

・・・・・・・・でも、どうなんだろう。

私が、彼に捨てられて泣き明かした翌日の、あのときも確か自販機の前で

優しさをくれたのも平沢だった。

沸々と考えると、なんだか彼しか居ないような気がしてきて、

打ち込んでいるPCの数字に集中力が欠けてくる。

とりあえず、お昼までは、頑張ろうと、頭を切り替えた。



手紙の主が、もしかしたら、後輩の平沢かもしれないと、思うと昼間での時間が待ち遠しかった。

謎を解くように、朝から悩まされていた手紙の差出主がわかるのかと思うのと、

一体あの手紙の意味はなんなのかと、問いただすことが出来るかも知れないと思うと、

いつもよりも、幾分か仕事の手が早まったような気がした。

昼を告げる、長い針と短い針が重なるのを確認すると、スクッと立ち上がって、私は急いで、

引き出しから財布を取り出すと、急いで、平沢の姿を探すために素早く席を離れた。

いつもは、そんなに気にもならない存在なのに、今は、彼の姿を探すのに必死になっている。

いつも、あいつは、どこにいるんだ？そんな疑問をひとつ、ひとつ、消していくように、

居そうな場所を自分の勘を頼りに探し回った。

最初は、営業部、喫煙室、自販機、食堂.....

自分の勘の鈍さに、はぁーと、ため息をひとつ吐く。

なんで、こうも見つからないのか。

あいつは、私が探しているのをわかっていて、どこかに隠れてんじゃないのか？

．．．．．ありえる。

あいつなら、やりかねない。

そんな気がしてくると、なんだか、手のひらの上で転がされているかのように感じて、

急に腹が立ってきて、わたしは、残り少ない昼時間を、自分の食事タイムに当てるために

一番、早く注文が出て、すぐに食べれる、そんなところはどこだったかなと、

頭の考える事柄を変換させながら、会社の外に出た。

春らしい、穏やかな日だなと思いながら、歩いていると、なんとなく春の匂いが風にのって

伝わる。桜の蕾がもう少しで開きそうだと、満開になった頃のイメージをしながら、通り過ぎて、

ひとつのお店の暖簾をくぐる。

早くて、すぐに注文が出てきて、一人でも気兼ねなく入れる、今日は立ち食いそばにした。

食券のところで、月見そばのボタンを押す。

そして、カウンターのおじさんのところに、食券を出して、待っていると、トンと肩をたたかれる。

「．．．．．あっ。」

「珍しいですね。先輩が、立ち食いそばなんて。」

「見つけた。」

「へっ？」

「探してたの。」

「えっ、俺ですか？」

「そう、俺をさがしてました。」

「・・・・・・・・・・はあ。」

ビシッと人差し指を前にさして、

「ちょっと、外で待ってて。すぐに食べ終わるから。話があるのよ。」

そう、宣言した瞬間、目の前に置かれたそばを食べるために、割り箸をパチンと割った。

その姿をみて

「・・・・・・・・・・先輩、かっこいいっすね。」

なんて、あきれてるのか、ほめてんのか、どうなのか、よくわからないけれど、

とりあえず、今の私の行動に、呆気にとられているのは、間違いない。

まっ、急がないと、逃げられては困るのだ。

私は、多分、人生で最高に早い早食いってやつをやったのけた。

そのせいで、今、胃がもたれてしまっている。



「ごめん、お待たせ。」

私の声に気がついて、顔をこちらに向けて、

「早いですね。別に、俺大丈夫だったんで。」

吸っていた煙草を揉み消している。

「うんうん、私が、早く君に確かめたいことがあったのよ。」

時計を見ると、あと少し時間に余裕がありそうだ。

「先輩？何ですか？」

「私回りくどい言い方出来ないの知っていると思うから、単刀直入に聞くけど、

私の家に手紙入れなかった？」

「・・・・・・・・」

黙っているのは、正解なのか、それとも、私が訳わからないことを突然言ったので、驚いているのか。

「間違ってたらゴメン。」

一応、謝っておく。

「・・・・・・・・やっぱ、先輩凄いですね。あれだけの言葉で、俺だってわかってしま
うなんて。」

-----あれ？当たってしまったって感じなのかしら・・・・・・・・。

「普段から、そんなに人付き合い良いほうではないから、私の周りなんて
限られてくるのよ。で？何であんなこと書いてよこしたの？」

「・・・・・・・・先輩、覚えてないんですよね。」

「へっ!？」

「ほんと、ほっとけないんですよね。しっかりしているようで、覚えてないんで
すか？」

「・・・・・・・・えっと、なんだろう？」

盛大に溜息を吐いた彼は、胸ポケットから煙草を取り出して、一本トンと弾いて取り
出して

火をつける。

「飲み会のときに、言ってたじゃないですか。」

「へっ？」

「先輩、失恋したばっかだっけ。」

「ええ!!わたし、そんな話してた!？」

コクコクと大げさに頷いて、

「してました。俺、かなり絡まれてましたもん。」

全然、覚えてない。

「嘘!？」

「ほんとです。酒癖悪いんですよ。っていうか俺限定で、絡んでくるから。」

「うっ・・・・・・・・ごめん。」

そして、私の中で、あることが一本の道のように繋がった。

ああ、何故私が腫れぼったい目をしていたのを、うつぶせ寝だという嘘をスルーして

目を冷やすように優しく労わってくれていたのか。

それでも、そのときだけでよかったんじゃないのかと思える。

・・・・・・・・いや、普通なら面倒くさい女とは関わりたくないのが本音だと思う。

それに、失恋してグテグテに絡んだ(らしい)次の日に、さらに何事もなかったかの
ように、

さりげない親切。

お節介までの家までわざわざ来て、わけのわからない手紙の投函。

そして、自分を探せ!だなんて、一体どういうことなのか・・・・・・・・。幾ら鈍い私
でも、なんとなく

感じるものが、今胸の中でフワフワと形になっていく。

全部要らないと思った感情、殻を作って冬眠するかのよう、沈めていたはずの感情
たちが

まるで、雪解けを待ちわびた春の新芽のように、のぞき始めてる。

「ねえ、近くて遠い存在って？」

「そういうことです。」

私は、彼の心のスイッチを押してしまったのかもしれない。

「・・・・・・・・」

朝、洗濯機のボタンのスイッチを押す動作がすきなのかもしいないと思ったことは、

どうやら、ここに繋がっているのかも知れない。

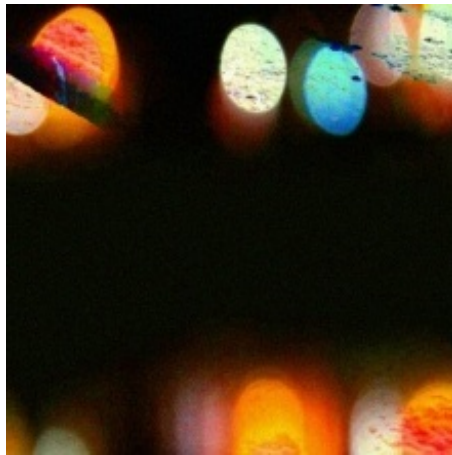
どれだけ、スイッチを押すのがすきなのだと自分で自分の心に突っ込みを入れている。
。

私が彼の心のスイッチを押す指ならば、彼は私の想いを受け止めてくれる片割れのボタン。

「----先輩？隣、俺でいいじゃないですか？」

ニッと笑った顔と、差し出された手に、吸い込まれるかのように私は手を重ねた。

FIN



雨の音を聴きながら私は持ち帰った仕事の資料を読み込んでいた。

家では静か過ぎるから、カフェのように少しだけざわついた雰囲気と

人の気配があると、それだけで一人じゃない気がして落ち着くのだ。

止みそうにない雨の中あなたは、私に会いに来た。

「きっと、ここに居ると思った。」

そう言って、少し雨に濡れた服の湿り気な匂いと一緒に、あなたはなぜか、向かい側に座らずに

私の隣に座って、こう言った。

「なあ？覚えてるか？小学生の頃、お前はいつも鬼ごっこのときは、いつも逃げるだけしか

しなかった。一度も鬼にならなかった。」

そんな昔の話を何だというのか・・・・・・・・

「・・・・・・・・そうだっけ？」

「そうなんだよ。俺は、いつもお前の代わりに鬼になってやったりもしたんだ。」

「う～ん、覚えてないかも・・・・・・・・。」

さっぱり、このひとは何が言いたいのかわからないけれども、

私を真っ直ぐに見て、いつもよりも・・・・・・・・切なそうな顔をしている気がした。

「お前はさ、俺に今つかまってくれるのか？それとも少し先の未来でつかまってくれるのか

知りたいんだけども・・・・・・・・。」

そう言って涙を浮かべている彼を私は、今までに見たことがない。

私を知る中で、こんなに切なそうな顔をした男の人をみたことがない。

その悲しそうな苦しそうな顔を何とか和らげたくて、

彼のひとさし指にそっと私のひとさし指を絡めた。

彼の瞳に今は困った顔の私が映っている。

彼は自分が投げた言葉の、私の返事を知りたがっている。

少し深呼吸するくらいの勢いで、私は息を吸う。そして、口を開いて

伝えないといけない。

私の出す答えは-----

「一年後の今日、ここでもう一度その質問をして欲しい」

彼は、その答えに納得してはいないようだったけれど頷いてくれた。

「俺は、その答えが出るまで、君に会わない。来年の今日まで、俺のことを
きみは毎日少なからず、考えてくれるだろ？」

そんな彼に、「馬鹿げてる・・・」そう告げようとした時に、

「それじゃ。」

素早く去っていく。

通り雨のように-----。

それは一瞬のような出来事で、

私の中で、あれは夢だったのじゃないのか

彼の幻だったのではないかとさえ思った。

彼は約束通り、あの日から存在を消したのだ。

私が連絡をしようと電話をしても取らなかったし、

会いに行っても、私には会ってくれなかった。

部屋の扉の向こう側に居る気配はするのに絶対に約束を破らなかった。

これじゃまるで、「かくれんぼ」と同じだ。

幼い時は、いつも鬼があの人だった。そして逃げるのはいつも私。

今回は、私が鬼になって、彼が私から逃げている。

初めて私は追う役（鬼）をしているわけだ。

近くにいるようで、遠い存在になっていて、彼が私に宣言したとおり、

私は、毎日少しの、ほんの一瞬でも彼のことを毎日思い出した。

彼の声は、どんなものだったのか、笑い声はどんなふうだったか？

彼の顔は、笑ったときや、喜んだときのことを思い出しては見るけれど、

霧がかかったように、彼の笑顔が分からなかった。

あの時、最後に会った時の悲しげな瞳で笑う彼の顔と声しか

思い出せなかった。

昔から何かと気が付けば私の側にいてくれた。

幼い頃からピンチになると助けてくれて、鬼ゴッコのときでも、自分が犠牲になって

私を最後まで逃がしてくれた。

泣きそうなことがあったときも、涙が零れる前に、それを超えるくらい言葉をくれたのだ。

今は、

彼と逢えない。

声も聞けない。

こんなに泣きそうになっている私の側に居てくれない。

それは私にとって、とても辛く悲しいことなんだと知った。

そして、こんなにも「愛しい」という気持ちが心に溢れていたことに気がついた。

誰かが言っていた。

「愛しい」とは、もう一つ意味があって、「かなしい」とも言えるのだと-----。

-----今なら、ハッキリしている。

そう、今の私は彼が居ないと 「かなしい」のだ。

愛しい気持ちで私の心は張り裂けそうなほど逢いたい気持ちでいっぱいなのだ。

一年後の今日。

彼との約束の日、

7月7日、七夕-----

一年に一度しか逢えない。

それも雨が降ったら逢えないんだよ。

七夕の日に雨が降っていた時に母から聞いた。

「彦星と織姫」のおはなし。

私は願った。

「どうか、夜には雨が止みますように」と-----

その夜は、私の願いも虚しく、一晩中雨が降り続いていた。

布団の中に入った私は、雨がコンクリに落ちて響く音を

ギュッと目を瞑りながら、聞こえなくなることを願っていた。

聞こえなくなれば雨が止んで、あの二人は逢えるに違いないと思ったからだ。

今年会えなかった二人は、来年まで会えないのだなと

眠気で薄れていく心でそう感じたのだ。

-----切ない関係の「彦星と織姫」のお話と、幼かった私

色とりどりの傘のしたを支えるように、雨から身を守るようにして歩いている人

信号待ちをしている傘が、華のようで、青信号になると、あちらに渡る華、こちらに向かってくる華で

歩行者の信号を歩く白い線が、まるで天の川のようにも見えてくる。

明日が七夕ということと、止みそうにない雨を見ながら、時間を潰すためにフラリと入った

ファミレスの窓を眺めながら、そんなことが頭に浮かぶ。

どうでもいいような、昔の記憶がなぜ蘇ってきたのだろう。

きっと、それは一年前のあの出来事が私の中で鮮明に思い出すことができるから。

まるで「彦星と織姫」と同じじゃないのと、自分と彼の今の状況に重ねている。

あの日のように今年も雨が降り続けている。

もしかしたら、あの時の約束も幻で、私の幻想だったのかもしれない。

もし、彼が現れなかったらどうしよう。

-----答えは、

私の答えはもう、去年のあの時、彼がこの席を立った瞬間に決まっている。

あのときに、伝えられなかった想いがどれだけあの後から自分を苦しめたかわからない。

彼は、もう来ないかもしれない。

あの日の約束を忘れているのかも知れない。

不安でいっぱいになってくる。

-----もう、ダメなのかもしれない。

目を閉じて、ファミレスの店内のざわつく音に溶けてしまいたくなっていた。

ふわっと嗅覚にあの湿った、雨の匂いがしたような気がした。

ゆっくりと目を開けると、彼が座っていた。

スッと前に滑り込むように私の前に座り込んできた人物を見てそう思う。

この人は、雨の匂いも一緒に連れてきたかのようだ。

「みつけた。」

ようやく長いかくれんぼが終わった。

「なに？」

「ううん、なんでもない。．．．．．ただ、ずっと鬼の役をしてくれていた気持ちが
わかったの。」

「．．．．．」

「一年前の今日に、わたしに鬼ごっこの鬼の話をしてくれたでしょ？」

あの時には何を言っているのかわからなかったけど、今は、その気持ちわかるから．．．．．。
」

一年前のように彼は私に質問をする。

「．．．．．それじゃ、きみは僕に捕まってくれるのは今なのかい？それとも少し先の未来？
」

あの時と違うのは、悲しげな笑顔じゃなく、優しく私だけを強くまっすぐに見てくれる

笑った顔だったことだ。

私の答えは決まっている。

あのときのように、彼の指に私の指を絡ませる。

ひとつだけ違うのは、

「今、捕まえて？」

そう言って私の目から雨滴がポタリと落ちた。

悲しさからの涙ではない。

それは愛しいと-----。

雨降る七夕でも、

ちゃんと想いあえば、逢えることを

私は心に染み込んでいく雨滴を知ったのだ。

fin



目の前にある、卵。

私はジッとみている。

-----これは、

生卵だろうか？

ゆで卵だろうか？

見た目じゃわからないのに、殻を割ってみると、わかる事実。

なんだか、これと似ているなと思えた出来事と、その卵を重ねてみる。

-----テーブルの上の憂鬱。

私は、右手に握り締めているフォークを今、その卵に振り下ろした。



電話口から久しぶりに聞こえるその声に、私はなんだか心からホッとする。

『久しぶり、なっちゃん元気してた?』

「うん、元気だよー、ポンちゃんは?」

ポンちゃんとは、いわゆる幼馴染。

高校卒業まで、ずっと同じだった。

進路決めという岐路にたったときに、夢がない私はとりあえず、大学に行って将来を

決めるという判断をして、県外の大学に進学。

ポンちゃんは、幼い頃からの夢だった美容師を目指すために専門学校に進んだのだ。

『私も元気。ねえねえ、同窓会のハガキ来た?』

「あっ、うん。ポンちゃんが出るの？」

私は、手元に同窓会のハガキを見ながら、彼女に尋ねる。

『うん、なっちゃん帰って来れそう？』

「う～ん・・・・・・・・どうだろう。」

ハガキに印字されている日時と、卓上カレンダーとを照らし合わせながら、曖昧な返答をする。

『なっちゃん、来てほしいな～。忙しいの分かってるんだけどね?』

「うん、私も久しぶりに皆に会いたいけどね～」

『じゃあ、決まりね。返信ハガキ送らなくていいよ。私が幹事の子に直接なっちゃん
は

OKだって言うておくから。』

「え～っ、まだ、バイトの予定も調整してもらわないと・・・・・・・・」

『駄目、もう決定したんだからね。』

はぁ～っとひとつ電話の相手にもわかるように、大げさにため息を吐く。

「・・・・・・・・わかったわよ。ポンちゃんには敵わないな。いつもはホンワカしているのに、

そういうところは強引というか、引かないってというか・・・・・・・・。」

話をしていると、不思議とあの頃の自分に戻っている。

すべてが輝いて、色んなことに満ち満ちている未来を信じていたあの頃に。

しばらく、他愛のない話をして電話を切ると、もう一度、同窓会のハガキに目を落とす。

あの頃より少しは平気になっているはずなのに、フと頭を掠め過ぎる人物のことを

思い返していた。

-----あの頃は、何もかもが輝いていた。

何も束縛されるものもなく、学生の本分とやらを全うすれば、それ以外は自由だった。
。

学校に行けば、気の合った仲間が待っていてくれたし、授業中は頬杖ついて、机の上の

空間で自分の世界を創れば良かった。眠りに誘うような教師の声はある意味、強力呪文のように

思えたし、黒板の上にある丸い時計は時が止まっているようにさえ感じたこともあった。

休み時間は、廊下の陽だまりが出来る場所が集まる定位置だった。

なんにも変化も起こらない、ただ普通に過ごす分には。

懐かしい過去を思い返すたびに、心の隅のほうに、こびりついている錆のようなものが、

浮かび上がってきそうになる。

それが表面に浮かび上がってきそうになるのを、無理に沈めるように、

懐かしさを思い出すのを止める。

どうしても、チラついては、消せなくなる人物を、私はまだ忘れそうにないからだ。
.....いや、許せそうにないからだ。

あれから、2年.....。それほど遠くはない過去に、

未だに気を緩めると、持っていかれそうなる。

瞼を閉じると、記憶の中の人物のうつむいた感じの横顔が掠める。

私は残像のような記憶を蹴散らすように、頭を横に降って、気分を入れ替えようと、窓を開ける。

生暖かく、よどんだ部屋に、外のシャキリとした冷気が、瞬時に入り込んでくる。

「…………さむっ…………」

-----ああ、もう冬なんだと、

ぶるっと身震いをして、ピシャリと窓を閉めた。

-----雪がチラつく朝だった。

私は電車に乗っていた。

窓の外では、故郷の風景が流れていく。

それを目で追いながら、

懐かしい気持ちと、安心する気持ちが込み上げてくるのを感じた。

そして、どこか不安な気持ちがあるにはあったのに、

見慣れた景色が近づくにつれて、その気持ちもどこか隅の方に追いやった。

駅に降りると、迎えに来てくれていた人物を見つけて私は大げさに手を振った。

「なっちゃん。」

大きく手を振ってこちらに向かってくるのは、幼馴染のポンちゃんだ。

何故、ポンちゃんと言うのかは、あるメーカーのジュースが大好きで、その頭二文字を

そのまま、あだ名にしたという、単純明快だ。

本当の名前は、山本良子。 良子と呼ぶよりも、やはり、私には彼女をずっとポンちゃんと

言い続けていたいと思う。

「なっちゃん～、 あか抜けたね。やっぱり都会に行くと、綺麗になるんだね。」

「ポンちゃんこそ、すごく痩せたよね。」

昔は、ぽっちゃりしていて、そこが可愛いと思っていたのに、今はその面影がないほどに

スッキリと細くなっていた。

「えへへ。まあそれなりにね。」

久しぶりにかける言葉は、なんとなくお互いの外見の変化を確認しつつ、どこが素敵になったかを

褒めちぎる業を、私達も大人になるにつれて、誰から教わるでもなく、身に着けた術のような気がする。

それでも、お互いに気心が知れているせいか、

「「ブッ！！」」

お互い、同時に吹き出した。

「もお～、ポンちゃん、やめてよね？そんなこと柄でもないじゃないの。」

「フフ、わかっちゃった？ちょっとばかし使ってみたかったのよね～、あっても綺麗になったねって

いうのは正直な気持ちよ？」

「ありがとう。素直に受け取っておくわ。」

「あっ、車、停めてあるんよ。」

「うん。」

横に並びながら、車が駐車している場所まで歩きながらも、お互いの近況をザッと報告しあう。

その日、

-----いや、長い付き合いの仲で一番驚いたことを発表されたのだ。

「なっちゃん、あのね、私・・・・・・・・、学校卒業したら、結婚しようと思ってるの。」

「・・・・・・・・うそ!？」

「・・・・・・・・あ・の・ね～。普通そこはおめでとう！とかっていう祝福の言葉じゃないの？」

あまりの驚きが先に出てしまって慌てて祝福の言葉を付け足す。

「あっ、ごめん。おめでとう。」

ポンちゃんは大げさに、首を立てに振りながら、

「そうそう、素直に祝福してくれてありがとう。」

「で？相手は誰？！私の知っている人？年上、同じ年？ねえどうなの？」

私は機関銃のように彼女を質問攻めにしていた。

ホンワカしている彼女には、次々と質問を浴びせないと、返答に日が暮れてしまうに
違いないと

私は長年のつきあいから、そう感じたのだ。

こころのなかでは、ポンちゃんが、結婚？えっ？もしかして、できちゃった婚ていう
のかな？

なんて頭の中でぐるぐる色んな可能性を連想させていた。

車に乗り込み、エンジンをかけ、

「出発するよ～」とあまりにも気の抜けた言葉に、

助手席に座った私は、やっぱりね。とってしまう。

「じっくり時間あるんだから、しっかりと話なさいよ？」と私はポンチャンに言う。

「そう？じゃあ、行きますか。」

ハンドルを握っているポンちゃんは、幸せそうな横顔をしていた。

真剣な横顔を、ちらりとみる。

いつまでも変わらないと思えていた自分達が、気がつかないうちに、変化していく。

外見も、心も、その速度は、きっと緩やかで-----。

人それぞれの速度で、変化していく。

けれど、止まるということがない。

-----彼女が、結婚だなんて・・・・・・・・・・。

それが一番大きな変化だ。

「ねえ、彼は同じ年なの？」

「う～ん、そうね。」

「どこで知り合ったのよ～？あっ、専門学校とか？」

「・・・・・・・・違うよ？」

「ふうん。で？どこで知り合ったのよ～」

「・・・・・・・・・・フフ。それは内緒。」

「もお、勿体ぶって～。」

「明日、その人に会ってもらうから、それまでの秘密で。」

「ん～っ、わかったよ。」

私は勝手に頭の中で推測する。

今まで、そんな男（ヒト）の存在を匂わせたこともなく、話も聞いたことがなかった。

それは、それで今まで教えてくれていなかったことに少し寂しく思えた。

幼馴染プラス、親友だと思っていたのに、親友には何もかも

包み隠さず教えてくれるものじゃないのかと思っているのは

私の独りよがりなのだろうか、少し寂しく感じた。

それでも、ポンちゃんの幸せを心から願う気持ちに嘘はない。

ちょっと寄り道しないかと、ポンちゃんの提案で、何も予定がなかった私は快く返事をした。

しばらく車を走らせていると、懐かしい建物の前。

「・・・・・・・・ここって。」

「懐かしいでしょ？学校。」

「うん。」

「降りて、少し歩いてみない？」

「そうだね。」

車から降りると、あの頃とは違った感情が込み上げてくる。

こんなに古かったっけ？と思わず、少し灰色が濃くなった校舎の壁に目がいく。

「ねえ、なっちゃん、あの場所、行ってみない？」

あの場所で、すぐにピンと来る。

「あっ、でも大丈夫かな？」

「平気だって。なんか言われたら、卒業生ですって胸張って言えばいいのよ。」

「あのね～、そういう言い訳通用するって思うのポンだけだよ？」

「そういう、なっちゃんは、慎重すぎなの。石橋叩いても渡らないタイプなのは今も
変わんないんじゃないの？」

「はいはい、わかったから。行ってみよ。」

あの場所とは、私達がよく、休み時間に溜まり場にしていたところだ。

天気の好い日は、日向ぼっこする猫のように、座って長い時間を過ごした

-----非常階段。

そして、あの頃の消したい記憶の一つも、あの場所から始まったこ
とも・・・・・・・・・・。

人気のないヒンヤリとした廊下に、パタパタと響くスリッパの音。

冬休みに入ったばかりで、いつもなら活気あるこの場所も静まりかえっている。
ポンちゃんがスリッパを指差して

「ねえ、ねえ、来客用だって。私達、卒業生だけれども、お客様なんだね……………」

ベージュ色のそれに、白く『来客用』と書かれた文字をふたり、まじまじと見る。

「……………まあ、そうなるんだろうね。」

学校の独特な匂いが鼻をかすめる。

その匂いは、在学中の時と全く変わらないもののなのに、

それすらも懐かしいもののひとつになっていた。

不思議と目に映るものが、あの頃と違って見える感覚。

散々かよい通した場所で、日常の一部だった空間が、過去のものだということ。

今、こうして歩いている廊下でさえ、どこか知らない場所に入り込んだよう

そんな気持ちで歩いている。

————— 「松下と山本じゃないか？」

後ろから、聞き覚えのある声が呼び止める。

急いで振り返ると、クラス担任だった細川先生が後ろから、歩いてきた。

「先生—————！！！！」

自分達も駆け寄る。

「お前ら、変わんないな〜！」

「えっ〜！先生、そこは嘘でも褒めるところだよ！」

「ガハハ...、俺は正直なもんで、嘘は言えない。」

「あー！！ひどい〜！」

「なんだ、何か用事か？」

「用事なかったら来たら駄目なんですか〜？一応、ここの卒業生なのに。」

ポン・・・・・・・・・・、さっきのことを有言実行しちゃってるよ。と心の中で突っ込みを入れる。

「あっ、私、こっちに久しぶりに戻ってきたんで、寄り道したくなって。」

「おい、おい、他に行くところないのかよ?!」

「せんせー、それ言っちゃ駄目ですって！」

「おう〜、そうか。」

先生と話をしていると、あの頃の自分に戻ったような気がした。

「まあ、いいんだけども、来訪者名簿に名前と時間書いとけよ。」

あっ、あと帰る時も時間記入忘れるなよ。」

「え〜っ、メンドクサイ。」

「おい、お前達はすぐ、そうやって面倒くさいっていいやがって・・・・・・・・・・。」

今じゃ、色々と厳しいんだよ。そんなわけで、帰る時は忘れずにな。」

「はあ〜い」

ハァ〜ッと大きなため息を吐いて、

「山本〜、お前は、返事の仕方相変わらずなんだな〜。そんなんで世の中渡っていけてんのか？」

「大丈夫よ〜、先生。」

「お前はどこからそういう自信が湧き出てくるのか……………それじゃあな〜。」

大またで歩いていく先生の後姿を見送る。

「はぁ〜、先生こそ相変わらずだよね。」

「だね。」

クスッとお互いに顔を見合わせて笑いあいながら歩いていると、

目的の非常階段の場所にやってきた。

「……………うわっ、懐かしい〜」

今日、何回目になるんだろうか、その言葉が思わず口から零れだす。

普通に見れば、何ともない場所なのだろうが、私達にとっては、かけがいのない時間を過ごした場所。

くだらないおしゃべりをしたり、お昼ご飯を食べたり、時には、サボるための避難所のような場所。

ここは知る人ぞ知る穴場なんじゃないかと思う。

私達が卒業した今は、誰かがこの場所で時を過ごしているのだろうか、フと思う。

そして、そんな振り返る記憶の中で、やはり掠める人物。

-----あのときに、指が絡むことがなければ、

今こんな気持ちでいる自分じゃなかったのにと・・・・・・・・。

階段の手すりにかけて手先がヒンヤリと冷たく、その冷たさが心に突き刺さるように感じた。
。

捕まった手すりの冷たさが、手の指先から全身に伝わって
おもわずブルッと身震いする。

「・・・・・・・・寒い。」

思わずこぼれさせてしまった弱気な声

「そうだね。そろそろ、帰ろうか。」

「うん。」

遠くの方で、運動部の掛け声が聞こえてくる。

ヒンヤリとした廊下を歩きながら窓の方を見ると、視界に白いものがチラついた。

「寒いね～、冷えてきたと思ったら、見て、外、雪だよ。」

「ホントだ。」

何時のまにか、グランドのが茶色と白のマーブルになっていて、

すべてのものが白に変わるのも時間の問題だろう・・・・・・・・。

窓にペタリとぶつかり、そのまま、ゆっくりと滑り落ちていく。

やはり、天候が変わりやすいこの時期とこの土地だからなのだと、帰ってきたことを実感する。

手を擦りながら、玄関まで戻ってくると、来訪者名簿に、時間を記入する。

「あっ、私が書いておく。」

「うん、ありがとう。」

そう言うと、ポンちゃんが、時計を見てその時刻を記入する。

アレ・・・・・・・・・・？

ハッとした顔で、ポンちゃんが、慌てて記入名簿を閉じる。

「さっ、行こうか。」

「・・・・・・・・あっ、うん。」

・・・・・・・・まさかね。

なんとなく、感じている違和感。

それが、なんなのか、今まで分からなかったけれど、

ポンちゃんの一瞬の焦りみたいなもので、少しだけ疑いがうまれる。

そして、記入名簿に、見間違いなのか、昨日の来訪者に、山本の名前がチラリと見えた

ような気がした。

『山本』なんて、多い名字なのだから、違うかもしれないのに、何故か引っ掛かる。

もし、それが、そうなら何故、今日もまた来たのか？

昨日は、下見にしに来たのか？

いろんな疑問が湧いて来るのに、何一つ、彼女に質問することが出来ない。

『-----。一体、何のために？』

車に乗って、会話をするものの、私の何かが、警戒する。

きっと、私の気のせいだと思う。

-----そう、信じたい。

「じゃあ、明日早めに迎えに行くよ。」

「あっ、うん。同窓会7時からだよな？」

「うん、でも、話したいこととかあるし、早めに会ってお茶でもしない？」

「そうだね。じゃあ、明日。」

後ろの座席から荷物を取り出すと、車のドアを閉める。

運転席のポンちゃんが、私に向かって笑って手を振る。

私も、同じように、手を振って、車が動き出して、角を曲がったところで、

身体に積もった雪を払いながら、玄関の扉を開けた。

車を発進してバックミラーを覗くと彼女がこちらを見ているのがわかった。

方向指示器を左にだして、曲がると視界から彼女が消えたことで、
大きなため息が自然と零れる。

久しぶりに会った彼女は、あの頃よりも、顔つきがやわらかくなっているようで、
安心したと同時に自分の心がキリッと痛い。

幼い頃から親しくしてきた

-----『なっちゃん』

お互いに共通する思い出を沢山多く持っている存在。

そして、親友と言える唯一他人でも近い距離感。
きっと、彼女は私のことを、そんな感じで思っていてくれている。

私はずっとそんな気持ちを踏みにじってきている。

高校を卒業したときに、それぞれ違った道を歩んでいくことに、何故か私は心から安堵していた。

-----私は彼女に嘘をついている。

明日が来れば、私は彼女に言わなければならない。

もう、後戻りできないのだ。

家の駐車場に車を停めて、エンジンを切ると、静かになった空間に、フロントガラスに降り積もっていく

雪が視界を遮るようで、それ以上に私の心の苦しみも閉じてしまえば楽になるのかも
しれないと

瞼をも閉じて、しばらくハンドルに額をのせて明日のことを考えていた。

私は明日、断ち切る思いで彼女に会わなければならない。

多分、もう二度と、親友と呼べる位置に戻ることが出来ないだろう。

彼女は、そのとき、どんな顔をするだろうか。

怒るだろうか

泣くだろうか

罵倒するだろうか

次々と思いが浮かんでは無理に消していく頭の中で、私も雪に埋もれて、白の中で

リセットできればどれだけ楽だろうか、そんな風に考える。

コンとガラスが叩かれたような気がして、顔をあげると、そこにはさっき別れたばかりの

彼女がこちらをのぞきこんでいる。

不意を突かれて、私はすごく驚いた顔をしているに違いない。

我に返って、なるべく冷静に、いつものように、彼女に振舞わないといけないと、

車のドアを開けた。

「・・・・・・・・どうしたの？ポンちゃん、具合悪い？大丈夫？」

ハンドルにうつぶせになっていたのを見られてしまったらしい。

「えっ、うんうん、大丈夫よ？少し眠たいなって思ったのよ。それより、どうしたの？何か忘れ物

あったの？」

今、出たばかりの車内をもう一度見渡す。

「・・・・・・・・うんうん、そうじゃないの。」

「？」

「ポンちゃんさ？何か隠し事してない？」

「・・・・・・・・えっ？」

視線がぶつかったときに、思わず逸らしてしまったことで、

「ねえ、やっぱり、何か・・・・・・・・隠し事してるよね？」

彼女は疑いが確信になったようだった。

「・・・・・・・・どうして、そう思うの？」

「学校から帰るときに、来訪者名簿見えたの。」

「・・・・・・・・なんのこと？」

「ポンちゃんさ？昨日も学校に行っているよね？」

「・・・・・・・・」

彼女と私の視界の間にチラつく雪が周りの音を掻き消すかのようで、この世界に、この時の流れに

二人だけ取り残されたかのように感じた。

このまま、そうなればいいのにという虚しい思いが胸の中で浮かんだが、

もう、戻れないのだという気持ちを吐き出すために出た、溜息は白く鉛色の空に滲ん

でいくようだった。

「-----ねえ、こんなところじゃなんだから、家に入らない？」

彼女の返事を待たずに、私は寒さに耐え切れず歩き出していた。

玄関の扉が開いたと同時に、その家の匂いが一瞬、鼻を掠める。

生活臭と違う、それでいて嫌なものでもなく、

その家々に染み付いた感じの家の匂い。

-----ああ、このにおいは、ポンちゃん家のにおいだ。

懐かしく思うのが不思議だと感じたと同時に、お邪魔するのは、久しぶりなんだなと思う。

「-----入って。」

ブーツを脱いで、向きを揃えていると、目の前にスリッパが置かれた。

「ありがとう。」

お礼を言って私はそれに足を入れて立ち上がる。

「お邪魔します。」

「あっ、先あがってて。今お茶用意していくから。」

「-----うん。」

何年も訪れていなかったはずなのに、彼女の部屋が二階だということがわかる。

私はそのまま階段を上がって行って手前の部屋の扉を開ける。

あの頃と変わった部屋の雰囲気に対し戸惑いながらも足を踏み入れた。

(へえ・・・・・・。)

昔はファンシーな感じのものが溢れていて、如何にも女の子という部屋のイメージだったのに

今は、そんな面影がないくらいにシンプル．．．．．というよりも、物が少ないことに驚いた。

その心の内を見透かされたかのように

「何にもない部屋でしょ？」

後ろから声がかかる。

振り返ると、お盆を手にしたポンちゃんが立っていた。

「あっ、．．．．．なんだか昔のイメージがあったから．．．．．。」

「あ～、昔は、ぬいぐるみなんかが、部屋を占拠している感じだったものね。

あっ、適当に座って。」

疑問に感じたことを、さっき投げかけたことが私の心にこびりついていて、いつ切り出せばいいのか

それとも話をしてくれるのを待っていたらいいのか、ポンちゃんが持ってきてくれたお茶をひとくち

口に含んで飲み込む瞬間に、それは切り出された。

「-----さっきの話だけれども．．．．．。」

「うん．．．．．。」

「昨日、学校を訪ねたんじゃないのか？ていうのは、そうよ。その通り。」

私は軽めにうなずいて、次ぎに発せられる言葉を待つ。

「．．．．．それは、同窓会の伝達をしに先生に会いに行ったのよ。」

「そうなんだ。でも、ポンちゃんが幹事じゃなかったよね？」

「・・・・・・・・そうね。私は幹事じゃないけれど、お手伝いみたいなものよ。」

わたしが知る限り、そんな率先して、お手伝いなんてする性格じゃなかったのに・・・・・・・・。

今の彼女は、あの頃のままじゃないのだと感じた。

「ねえ？ なっちゃん、覚えてる？」

「えっ？」

「・・・・・・・・橋本君。」

その名前を聞いただけで、心臓がキュッとつかまれたような気がした。

私の顔が強張ったのが分かったのか、

「・・・・・・・・ごめん。まだ、覚えている・・・・・・・・よね？」

気まずい空気を裂くように、携帯の着信音が鳴る。

「あっ、電話だね。」

ホッとしたような顔をしたポンちゃんが

その音を探すように鞆の中から取り出し着信者の画面を見て立ち上がる。

大事な用件の電話なのか、聞かれたらマズイのか

「・・・・・・・・ごめん。ちょっと、電話でてくるね？」

「うん」

そう言って、部屋を出て行った。

．．．．．橋本君。

何故、彼の名前を出したのだろうか．．．．．。

忘れるはずない。

私は、その名前を忘れるわけがなかった。

思い出すだけで、キュッと掴まれるような痛さが心臓に走る気がして、思わず、手で押さえる。

ぼんやりと窓から見える白く舞っている雪を目で追いながら、

私はあの頃のことを思い出していた。

名前を聞いただけで、ちくりとした痛みが心を突くようだ。

あれから、二年は経っているのに、「橋本」 その名前だけで、瞬時にあのときに戻ってしまう

自分に辛くなる。

ただ、自分が忘れられないだけ。

踏み躪られたんだという思いが沸きあがるから、許せない。

彼にとっては、きっと日常的なゲームみたいな感覚だったのだ。

それを、疎い私は、本気になってのめり込んでしまっただけのこと。

あの日の放課後のあの場所で私は

夕暮れ時のあの時間が・・・・・・・・

あの、空の紅色が・・・・・・・・

あんなにも甘くて切ないものだと知ったのだ。

そしてあんなにも美しい指を持った男（ヒト）がこの世にはいるのだと知ったのだ。

その指が私の不恰好な指と、絡み合ったときに、まるでそれは、違う生き物のように

みえたのだ。

—————放課後、抜き打ちテストで平均点以下だったポンちゃんが補習のために
時間がかかっていた。いつもは、待たずにサッサと帰るはずなのに、なぜかあの日は
気まぐれで、「待っている」なんて言ったのだ。

待っている場所も、色々な場所があるのに、いつもの非常階段のところで、時間を潰そうと
そう思った。きっと、暇している、仲間の誰かが居ると、そう思ったから。

非常階段を一段、一段、上がっていくと、屋上近くの踊り場が、秘密基地のようになっ
ている。

どうせ、鞆の中に、文庫本が一冊確か入っていたから、それを読みながら時間を潰そうか、
それとも、他の誰かがいれば、おしゃべりしていれば、時間が過ぎる、そんな風に考えて
いた。

—————先客が居た。

ドキッとした。

それも、いつもそこに居る人じゃなく、

．．．．．確か、隣のクラスか？みたことのある顔だと思った。

「あっ．．．．．」

私の気配に気がつくと、視線をこちらに向けた。

「．．．．．えっと、ごめん。ここって、いつも君達が溜まっている場所だよね？」

「．．．．．うん、でも．．．．．。」

彼は立ち上がり、去ろうとしていた。

「待つて。」

自分でもびっくりするくらいに何故か彼を呼び止めていた。

「えっと・・・・・・・・、本、途中じゃないの？」

手に持っている文庫本をゆび指すと、ああ、と思った感じで自分の手元を目で確認している。

「・・・・・・・・ああ、まあ、」

「別に、行かなくてもいいよ。私も、本読もうと思ってるから。」

そう言ってゴソゴソと自分の鞆の中から本を取り出して彼に見せる。

彼が立っているほうとは逆の壁を背にして、私は地べたにペタリと座り込んだ。

しばらく立ち尽くしていた彼も、またその場に座りなおして、持っていた文庫本の折り曲げ
たらしい

ページを開いて読み始めたようだった。

パラリとページをめくる音が重なる。

遠くの方で吹奏楽部の音が聴こえてくる。

窓から柔らかい陽の光が差し込んできて、私の影が彼の足元の方へ伸びている。

この場所は、広い校舎の中で、一番静かなんじゃないかと思うくらいに

忘れられた空間のように、そこだけがゆっくりと時が流れているように、感じたのだ。

ゆっくりと静かに流れる。

ただ互いのページをめくる音だけが、たまに邪魔にならない音をつくる。

本を読んでも視界に入り込む彼の存在感。

片方伸ばされた足、もう片方の足を曲げ、その一番高く出来た丘の上に腕を乗せている。

パラリとページをめくる細く長い指が、文字を追う視線の一連の動作に私は見惚れていた……………。

クスッ と笑う声に我にかえる。

「……………あのさ、穴が開くような感じで見てない？」

「あっ、ごめん。なんか、ページをめくる指がきれいだなぁと思って見惚れてた。」

彼は自分の手に視線を落としながら

「そうかな？そんなこと言われたこと、今までなかったなー」

と手をヒラヒラさせてみせる。

「すごくページをめくる感じがいいなって思ったんだけど。」

ほら、私の指ゴツゴツしてて、女の子らしくないからさー」

と自分の手のひらを見せるように目の前にあげて見せた。

「そうかな？俺からみると女の子らしいと思うけど？」

自分の手に視線が注がれるのに気がついて、急に恥ずかしくなって、ぎゅっと握り締める。

「ほら。」

「……………へっ?!」

手を私の目前につきだして

「合わせてみ？」

ニッコリ笑って言われて、私は催眠術にかかったかのように、彼に言われるまま

自分の手を彼の手のひらに重ね合わせた。

そこから、緊張に似た、いつもよりも早鐘を打つような鼓動のリズムが

伝わってしまうのじゃないかと-----

更に焦りが顔に出ないように平常心だぞ？と心にひとりごちた。

「なーんだ。」

「えっ？」

「全然、女の子の手じゃん。」

手を合わせながら、私に笑いかけてくれた顔を見たときには

もうすでに、私の心にポトリと落とされてしまって

それが身体中の細胞に急速に広がりはじめていっている気がした。

-----ああ、これが恋に落ちた瞬間 なのかも知れないと・・・・・・・・・・。

夕暮れのあたたかいオレンジが彼の肩越しから見えたときに

合わせていた指先がずれて、私の決して華奢ではない指と

まるで同じ人間なのかと思うくらいに、彼の長い指と絡んでしまったとき

いままでに感じたことのない時間が流れていることに

影が重なった瞬間に気がついたのだ。

重なり合った影がゆっくり離れても、絡んだ指は、そのままだった。

もう一度、影が重なるかと、思われたときに下から駆け上がってくる足音に気がついて

今まで自分ではないものと絡まっていたものが瞬時に解かれた。

弾くように・・・・・・・・何事もなかったように。

でも、それが夢ではない証拠に見つめていた瞳が細くなって

「-----赤いよ？」

と

それは、夕暮れの赤さなのか

自分の所為のための赤さなのか

どちらを言ったのかは、分からない訳ではない。

「あ〜っ、いたいた！」

大きくなる階段を昇ってくる足音と同時に、聞き覚えのある声の主に、今までの甘美な時間が

現実に戻されたみたいに我にかえる。

彼は立ち上がって、ポンちゃんを入れ替わるように、降りていく。

「・・・・・・・・今のって、橋本だよね？」

「あっ、うん。」

今起こった出来事を気付かれないように、視線を彼女から逸らして、なるべく平静を

装いつつ

文庫本を鞆にしまいこむ。

「なんか、話とかしてた？」

「あ〜っ、うん？彼も本読んでたから、少しだけ話して、お互いに本読んでただよ。」

「……………ふうん？」

「なっ、なによ。」

「なんだか怪しいな〜と思って。」

「もお、何にもないよ。」

「だって、動きが妙に不自然な感じだし？」

「ばっ、バカじゃないの？そんな風に聞くからでしょ？」

伊達に幼い頃からの付き合いじゃないなとわかる。

それでも、今さっき生まれてしまった感情を、すぐに言うほど私の心は固まっていない。

なんだか、恥ずかしいような、言ってしまった瞬間に、壊れてしまうのじゃないのかと思えた。

「さっ、もう帰ろうよ？散々待ったんだから、何かおごってね。」

「えっ〜！！」

-----だから、もう少しだけこの気持ちは自分の中でだけで揺れていたいのだ。

ジワリ、ジワリとそれが自分の思う良い方向に向かっていくことを願うために……………。

-----あれから、非常階段のあの場所で、彼と二人で会うことが多くなっていた。

誰にも秘密で、それでいて、二人だけの時間がこれほど楽しいなんて

はじめて知った感情も含めて私は彼にのめりこんでいった。

それでも、親友のポンちゃんには、上手く隠しているつもりだったのに、

「なっちゃん、橋本と付き合っているんでしょ？」

と訊ねられた。

「・・・・・・・・えっ？」

「最近、なっちゃん、こそこそしてるでしょ？」

「別に、こそこそなんて・・・・・・・・。」

首筋にポンちゃんの指が触れる。

「・・・・・・・・ここに、ほら。」

思わず、自分の手でそのしるしを隠す。

「・・・・・・・・なっちゃん？アイツの噂聞いてるかもしれないけれど、色んな子に手を出してるっていう

話だよ？」

「それは、噂でしょ？」

「でも、私はなっちゃんが心配で・・・・・・・・」

「もお、ほっといてよ。」

私の身体の中が沸点のように熱くカッとして、ポンちゃんのことを遮った。

(マズイ・・・・・・・・)

悲しそうな瞳をしたポンちゃんをその場に置いて、私は自分のどうしようもない気持ちを

収集できずに、逃げるようにその場を立ち去った。

早歩きで歩く私の足の裏から、地面の硬さがそのまま頭に響くかのような感じがした。

ズンズンと歩く速度と同じように、騒ぐ怒りに似た波のように、どんどん上昇するかのようだ。

誰に対しての怒りなのか、私なのか、————いや、違う。

ポンちゃんに、自分の不安に思っていた心を見透かされたような気がしたから、

それを、自分で認めたくない気持ち。

噂なんてそんなの知っている。

それでも、私は自分の彼に対する気持ちを止めることが出来ないくらいに夢中になっていた。

あの手が、私の手と重なるときに、魔法にかかったような感じになる。

痺れて、溶けて、心も、すべて持っていかれるのだ。

時間が許す限り、彼との時間が欲しくなる。

彼の声も、手も、瞳さえも、どれもが、私には、すべてだった。

そんな甘い時間なんて、ずっと続かないなんて・・・・・・・・。

分かっていたのかもしれない。

心の隅で、わかっていた、だから、ポンちゃんに言われた言葉を否定することで

許す限りの魔法のようなときを継続できるんじゃないかとバカみたいにそのときは・・・・・・・・。

信じていたからかもしれない。

私は、その足で、彼の元へ急いで向かっていた。

急ぎ足で、彼が待っている場所に行くと、頬杖ついて、窓の外を眺める姿を見つける。

その瞬間、今、ポンちゃんと言い合いになった、罪悪感みたいなものが、

一瞬でどこか心の隅に消え失せた。

彼に近づくと、気配を感じた彼がこちらを振り返る。

「-----なつ？」

彼に名前を呼ばれて、嬉しくなって、そのまま彼の胸にコツンと頭をのせる。

ポンポンと頭を撫でられて、そのまま抱きしめられる瞬間が、今、生きているなかで一番幸せだと感じる。

さっきの噂が頭を掠めたが、そんなものより、今この現実の状況だけを信じればいいと

そっと髪の毛を撫で上げられて、彼の鼻先が自分の鼻先にソッと引っ付いたときに

それが合図かのように目を閉じて、唇に零れてく愛しさ。

永遠に続かないと思っていた気持ちも、きっと錯覚だとさえ思えてきていた、信じてみようと思えた

矢先に、それはとてつもなく冷たい仕打ちで思い知ることになったのだ。

+++++

「ねえ、あれってなつの彼氏じゃないの？」

「えっ？」

彼の隣には女の子が並んで歩いている。

後姿がとても楽しげに、それは私が彼に対して表現していたような、そんな感じした。

「大丈夫？あの子誰か確かめて来ようか？」

「・・・・・・・・・・いいよ。行こう。きっと彼じゃないから。」

「でも・・・・・・・・・・。」

「似てる人だよ。」

あれは、きっと彼だ。

好きな人のこと間違えるはずがない。

私の気持ちが、このときに一方通行だったんだということを一瞬で悟った。

それを知った時点で、問い詰めたり、声を荒げることをしたくないと思った。

確かめて、彼がどんな反応をするかわかるから・・・・・・・・・・。

なにより、あのときの夕暮れのオレンジ色を忘れたくなかったからだ。

あの瞬間だけは、きっと二人とも、絡み合った指と同じように、心も通じ合っていたと

思いたかったからだ。

彼らとは逆方向に引き返す。

心臓が絞られるくらいに痛みが走る。

色んな思いが次々と押し寄せる。

それからの彼は、ひとつのゲームを終えたかのように

次は新しいゲームに夢中になっているようだった。

最初から割り切っていると思っていたのか

こうなることがわかっていたかのようで

それっきり会いに来ることもなければ

いつも待ち合わせていた場所で、しばらく待っていても、現れることもなかった。

ただ、わたしが彼に深くのめりこんでいただけに、過ぎないのだという事実だけが

突きつけられただけだった。

ただ、何事もなかったかのように、ただひたすらに、心に残った思いが消えていくのを

私は、じっと待ち続けた。

時間が経てば薄れていく、忘れることが出来るんだと、そう自分に言い聞かせて。

そして、あんなにも愛しい感情をも、憎しみの感情に変換することで、私は

卒業する頃には、立ち直ることが出来た。

廊下で擦れ違うことがあっても、視線を合わせなければ、大丈夫だったし、声を聞いても

心で鼻歌を歌いながら、聴こえない振りをした。

誰か他の女（ひと）と会話している姿をみても、視界に入ったほんの景色の一部だと思うように

して、ずっとずっと、許さないと心に刻んで、卒業したのだ。

そして、さっき、名前がでたときに、あの頃の、思いが溢れてくるかのように、私の心に広がって

暗いものにしていて。今の外の天気のように、どんよりとした鉛色の空が、

そのまま私の中に流れ込んでくるかのような気持ちが支配していた。

-----「ゴメン、お待たせ。」

部屋の外で電話をかけていたポンちゃんが戻ってきたときに

私は何故か、すべてが繋がったような気がした。

-----あのとき、彼と一緒に歩いていた人物が誰だったのか、

ほんとうは、あのときすでに、わかっていたのかも知れない。

.....ただ、その真実を知るのが怖くて、どちらも失うのが怖くて、

私は無理やり蓋をするかのようにその疑う気持ちを閉じたのだ。

信じたくなかったのかもしれない。

だからあのときに追いかけることをしなかった。

それは一番恐れている答えを直接知りたくなかったから。

一番の裏切りだけを信じないように、平静に、それは知らなかったかのように、

普通に振舞うことで、私は彼女とずっと築き上げてきた関係を失うのが怖かったから。

さっき、彼の名前が出たときに、それは確信に変わってしまったのだ。

私の中で、繋がってしまった瞬間だ。

「ポン.....？橋本君は元気なの？」

私は、まっすぐに彼女をみた。

彼女の瞳が震えているようにみえた。

私が投げかけた問いかけに、ポンちゃんは、動揺している。

視線をテーブルの上のカップに滑らし、私との視線を外した。

彼女が口を開く前に私は、もう一度訊ねる。

「今の電話も橋本君だったんじゃないの？」

「・・・・・・・・」

「もしかして、結婚する相手も彼なの？」

嘘だと思いたかった。

あのときに、彼の隣で歩いていた女の子が、ポンじゃないことを心の中で願った。

彼女は、ため息に近い息を力なく吐くと、私の顔を見て

「そうよ。・・・・・・・・橋本君と結婚するの。今の電話も彼よ。」

核心に変わった瞬間だった。

「・・・・・・・・ひどい。」

「ひどい？・・・・・・・・誰が？」

「決まってるじゃない。ポンだよ。」

今までみたことのない、冷たい視線で私をみる。

「・・・・・・・・わたし？」

「そうよ。私が、彼のことすきだって知ってたのに・・・・・・・・」

「なっちゃん？それは、違うよ。」

「・・・・・・・・・・どうということよ？」

「最初から、彼は私を選んでた。」

「どうということなの？」

「あの日、なっちゃんは、彼と二人で非常階段のところに居たでしょ？」

-----そう、あの日がなければ私は彼とも出会わずに、今もこんな想いをすることもなかった。

今でも鮮明に思い出すことが出来るくらいに、私には-----

「なっちゃん？偶然の出会いだって思ってるでしょ？でもね、彼があそこに居た理由はね、

私と待ち合わせしていたからなのよ？」

「・・・・・・・・・・なっ、何言ってんの？」

しばらく沈黙があった後に、口を開いて出た言葉

「・・・・・・・・・・彼と私は付き合ってたの。」

ポンと橋本君が付き合ってた！？

そんな言葉が出てくるとは思わなかった。

「ちょっと、どういう意味？つきあってて・・・・・・・・・・。

ポンは、そんな男の人の影なんて全然なかったじゃない。」

「・・・・・・・・・・隠してた。言えなかったのよ。」

「何故そのときに、言ってくれなかったのよ。」

「言えないよ。なっちゃん、橋本君しか眼中になかったじゃない。何を言っても訊く耳持たずって

感じだったし・・・・・・・・。傷つけないように橋本君を悪者にして、諦めてもらおうと忠告したけれど、

解ってくれなかった。彼も、なっちゃんに手を出しているってわかったから・・・・・・・・。」

目の前で話をしている彼女が、私の知っているポンちゃんじゃないような気がした。

私の知っている彼女は、いつもホンワカとしていて、優しくて、いつもニコニコしてて、それでいて

どこかおっちょこちょいな感じだから、私がしっかりと支えなきゃと思っていた。

同じ歳でも、私がお姉さんで彼女が妹のような、そんなふうにさえも感じていたのに・・・・・・・・。

なのに、なんだろう、私が思っていたものが全部、作り物で、私が良いように彼女を理解して、

いたというのだろうか・・・・・・・・。

「・・・・・・・・それでも、本当のこと言って欲しかった。・・・・・・・・最初に言って欲しかった。」

「言って欲しかった？・・・・・・・・なっちゃんは、私が言ったら立ち直れなかったんじゃないのかな？」

「-----ちょっと、酷いよ、なんで、そんな事が言えるの？」

私の知っているポンはそんな傷つけるような酷いこと言わないじゃない？いったい、どうしちゃったのよ？」

クスッと意味ありげな笑いが彼女からこぼれる。

「ほんと、あの頃から全然、変わってないんだね。

なっちゃんさ～、わたしの何をみて、知っていると思うって言えるの？

いつも私より少しでも優位な立場に居ないと気がすまなかったじゃない？橋本君が私とつきあっていて

なっちゃんとは遊びだったなんてこと教えてたら、なっちゃんは立ち直れなかったんじゃないの？」

「そんなこと、」

「あるの！いつも、そうだよ。だから、あの当時だって、ほんとうのこと言えなかった。

私はなっちゃんにずっと嘘をつくことになった。

彼はね？優しすぎるのよ。来るもの拒まずっていうところがあるから。だから、なっちゃんと

そうだったって知ったとき、私は、・・・・・・・・。」

しばらく沈黙が続いたが、口を開いたのはやはりポンちゃんからだった。

「どちらにせよ、お互いにあの日を境に、取り戻せない、戻れない道に進んだっていうことよ。

あの日にはね、偶然という偶然が重なったのよ。」

そう、言い切ったポンの顔は、私には見せたことがない、横顔だった。

彼女とは、もう二度とあの頃の何でも話して時間を共有して、楽しんだ記憶が残る頃には

戻れないのだということ知った気がした。

「この際、もうひとつ、言わせて貰えば、なっちゃんは、生卵なのよ。」

「・・・・・・・・」

「殻に包まれて、われてしまえばもろいのよ。私からすれば、あの頃からなっちゃん
は

今も、そのままなのよ。」

突然、生卵呼ばわりされた私は、啞然とした。

「生卵よ。殻で防御してるけど、割れてしまえば、もろい心なのよ。」

それでも、ポンの言うことは理に適っているような気がした。

私は負け惜しみな気持ちで

「じゃあ、ポンは何なのよ。」

とたずねた。

「わたしは、ゆで卵よ。殻を割っても、また盾になる白身で守られてるし、最後に黄身に到達するでしょ？」

「でも、裏を返せば、それだけ臆病なんじゃない。」

驚いた顔をした彼女は

「・・・・・・・・ほんとね。そうなのかもしれないわ。臆病なのかも知れない。

でも、それでも、すぐに、自分の弱い素の心を相手にさらすことが

ないじゃない？それって、すぐには崩れないほどの心を持っているってということじゃないの？」

今度は、わたしのほうが驚いた。

ポンってこんなに上手に切り返すことができる子だった？

わたしが、知っていた彼女は、いつも言いたいことも言えない、いつも私の意見を否定もせず、

それでいいよ？とわたしの後ろを引っ付いてきていた感じがしたのに・・・・・・・・。

今のわたしが知らない彼女に反論できない。

「さっきから、何よ、卵の話なんて……………」

と、咄嗟に口から出た言葉に、なんて子供みたいな言い返ししかできないのだろうと、

悔しがる自分の心に苦笑いしている。

「……………ああ、これが目に入ったから？」

視線がテーブルの上に注がれる。

お茶と一緒にお盆で運ばれてきた皿に卵が乗っかっている。

えっ……………卵！？

ちょっと、待ってよ と言いたくなる。

お茶請けの代わりに卵！？

それに言われてはじめて卵の存在に今頃気がつく私もどうなんだ。

-----呆れた。

彼女にも自分にも……………。

こういうところは、相変わらずの私のずっと昔から知っている彼女だと思うと

こんな状況なのに今、凄く私の心の中は、怒りとショックとで、どうしようもないはずなのに

突然、予想していなかった可笑しなことに、思わず、笑うことなんてないはずだったのに

「……………バツ、バカじゃないの。」

と噴出しながら怒るという不思議な空気にガラリと変わってしまった。

こういう突拍子もないことを普通にやってのけるところが、

彼女らしいなと思い出して私は泣き笑いしていた。

「・・・・・・・・ごめん、なっちゃん。」

彼女もまた、泣き笑いをしていた。

しばらくして落ち着いたときに、ポンは口を開いた。

「なっちゃん、ずっと、私、黙っていることが辛かった。彼か、なっちゃん、どちらかを選べなんて

私は出来なかったし、どちらも手離せなかった・・・・・・・・ずるいのよ私は・・・・・・・・。」

あのときから、今日までのことを彼女は語り始めた。

彼とは、皆には内緒にしていたこと。

何時かは私に話そうと思っていた矢先、私が橋本君に熱を入れてしまったこと。

よくある些細なことで痴話喧嘩したときに、たまたま、あの日

私が彼に声をかけた事で彼も魔が差したらしく、私とそうってしまったこと。

それに気がついた、ポンは身を引こうとしたけれど、やっぱり

お互いに好きな気持ちは変わることがなかったこと-----。

そして高校を卒業しても、二人の付き合いは続いていて結婚を決意したという。

それで、このままでは、やはりいけないと、逃げていてばかりいてはいけないと思って

私にすべて言うために仕組まれた同窓会。

「・・・・・・・・ちょっと待って、同窓会っていうのも、嘘なの？」

「うん、じゃないと、なっちゃん、なかなか、帰ってこないだろうって思って・・・・・・・・。」

「厭きたわよ・・・・・・・・えっ、あの同窓会のハガキは？」

「私が作ったのよ。」

そこまで念入りにするかと思うと、

「じゃあ、学校に前日に行ったのは？」

「あれは、・・・・・・・・一応先生に結婚の報告と、次の日になっちゃんに行っても

そのことには触れないでほしいっていうことと、その、もし出会っても知らない顔して
って？」

「えっ、でも会ったよ？」

「そうなの・・・・・・・・。あれだけ釘刺したのに・・・・・・・・。途中で、気がついたから慌て
て去っていったでしょ？」

「・・・・・・・・確かに。」

思い返せば、先生の挙動不審な行動らしい感じがあった気がしたから、ポンの行動にも疑問
が

沸いてきたのかも知れない・・・・・・・・。

「あとね？あの非常階段に行って、なっちゃんに、この話を明日しなきゃならないなと思っ
て

自分なりの決意みたいなもんよ。・・・・・・・・でも、本当は、あの頃に戻りたいなって思っ
たのかも

知れない。それで、そのときに、言えばよかったかなって・・・・・・・・。」

皿の上ののっている卵をひとさし指の腹で押しながら、私の言葉を待っている彼女に、

「ねえ、その卵って生卵なの？ゆで卵なの？」

と訊ねる。

「これは、どっちだと思う？」

「・・・・・・・・ゆで卵？」

「見た目じゃわからないものね。」

「・・・・・・・・そうだね。」

そして彼女がひとつの卵を私に差し出して

「なっちゃんは、今の私を許せる？それとも-----」

その後続く言葉をお互いに察しているのに

言えない

聞けない。

わたしは、彼女をやはり、大事な幼馴染兼親友という関係を、壊したくない、失いたくないという

部分のほうが大きだからだ。

でも、あの頃からずっと過去の出来事を引き摺っていて、思い出すと、キリリと胸が

痛くなる。その原因を知っていながら、ずっと黙っていた彼女のことを許せないと思う自分もいる。

許せる？

許せない？

----わからない。

私は彼女から手渡された卵。

目の前にある卵。

私はジッとみている。

-----これは

生卵だろうか？

ゆで卵だろうか？

見た目じゃわからないのに、殻を割ってみるとわかる事実。

その卵を今の状況に重ねてみる。

これは、賭けだ。

生卵なら許さない。

ゆで卵なら許す。

こんなことで、決めれることではないが・・・・・・・・

-----テーブルの上の憂鬱。

私は、右手に握り締めているフォークを今、その卵に振り下ろした。

フォークを振り落とすと、卵がパリッとわれる音がした。

それは、命が生まれる音ではなく、破壊するために生まれた音のような気がした。

二者選択しかない答えをこんなことで、決めてしまうのかと思えている自分もどうかしている。

それでも、自分では決めきれないことを、何かに頼りたくなったことのほうが大きかったからかもしれない。

グチャッと鈍い音がそのあとに続く。

「!?これって……。」

わたしがどちらかに選択しないといけないと思っていた答えじゃないものが出てしまったようだ。

中身は、生でもなければ、ゆでたものでもなく、

「……温泉たまご？」

ふうとため息を吐きながら、ポンの顔を見る。

中身が、温泉たまごだったということと、あれほど、生卵か、ゆで卵か

散々、力説で語ったポンの言葉を鵜呑みにして、手渡されたのが、どちらかしかないと思っていた

自分……。

今までの緊迫していた空気とか、

友情をとるか、

いままで私が裏切られていたこととか

ショックな気持ちとか、

そんなものが、全部どこか飛んでいってしまったような気がした。

「・・・・・・・・あっ、フォークじゃなくて、スプーンだね？」

それでも、少し抜けた感じのところは、幼い頃からの彼女であることも間違いない。

そんなことを、考えていると、何もかもが、どうでもよくなってきた。

「スプーン、持って来るね？」

「いいよ。なんとか、食べれるよ。」

いつのまにか、彼女は、私の考えていた、思っていた以上に、斜め上行く感じで、
変わって行って

いることに。

-----いい意味でも、悪い意味でも。

二人の結婚は祝福できるかも知れない。

それでも、彼には会うことはまだ出来ない。

あの頃の想いを未だに心から消そうとしても、どうしても消せずにいる。

ポンが言うように、彼はあの時、わたしとは、そのときの気まぐれなようなものだったとしても、

わたしの気持ちは嘘じゃない。

本当に大好きだった。

「ポンちゃん、おめでとう。」

これは、今のわたしの精一杯の言葉だ。

とろりとしたソレをフォークで口に上手く運ぶことが出来ないように、

今の私のは、それ以上の気の効いた言葉は出てこない。

-----嘘も言えない。

嘘を言ったところで、長年の付き合いから、それは私の本心じゃないと、すぐに伝わるだろう。

「・・・・・・・・やっぱり、フォークじゃ無理みたい。」

-----あれから、

わたしと彼女は連絡を取ることはない。

それは、友情を断ち切るではない。

時間が必要なのだとお互いにわかっているから。

きっと、彼女のウエディングドレス姿は綺麗だったに違いない。

今頃は、二人で新生活をスタートしているに違いない。

わたしは、わたしで、忙しい毎日に追われて、それに慣れる為に、ただ目の前の生活を

こなすだけで精一杯だった。

社会人になった私は、毎日の生活をこなすのに一杯、一杯だった。

-----慣れない仕事、人間関係、逃げることの出来ない現実。

歳を重ねていくと、月日が流れるのが早いと聞かされていたのが、

実際に自分もその通りだと思えている頃には、名字も変わって、愛しい存在を腕に抱き

母親という立場に変わっていた。

地元に戻らず、相手の田舎で生活をして、何時の間にか気がついたときには、

自分の名前と呼ばれることも少なくなっていて、"〇〇ちゃんのパママ"になっていた。

春に、三歳になった娘は、近くの幼稚園に通うようになった。

少し遠くから通園する生徒には、お迎えのバスが送迎をしてくれるが、歩いてすぐの私は

幼稚園まで送迎をしている。

手を繋いで、帰ろうと玄関のところで靴を履き替えるのを見守っていると後ろから声が掛る。

-----「ともちゃんのパママ。」

それは、小さな女の子の声だった。

振り返ると、そこには、「とも」の幼稚園のクラスメートの女の子が、立っていてニコニコとわらって

私の顔を見上げている。

私は、その子の視線に自分の視線が合うように、膝を折って

「どうしたの？」と訊ねる。

「あのね、ともちゃんと遊びたいの。」

ツインテールにした髪の毛が柔らかそうに跳ねる。

パチパチと瞬きする睫毛の長い、目が栗のようにまん丸な可愛らしい小さな女の子は、

目をキラキラと輝かせて私を見ている。

「-----えっと、お名前はなんていうのかな？」

「やまもと まりあ」

「まりあちゃん、じゃあ今度遊ぼうね？」

「いいの？じゃあママに言うてくる。」

くるりと向きを変えて走っていく。

その先に立っているのは-----

まさか、そこで再会する人物じゃなかったとき、予想していなかったとき、

驚いたときが同時に起こったとき、声が出せないもんだということを身をもって知ったのだ。

その人物が、女の子に手を引かれながら、私に近づいてくる。

私は多分すごく間抜けな顔をしていたに違いない。

「なっちゃん、目がまんまるになってるよ？」

といいながら、あの頃と変わらない笑顔

「・・・・・・・・ポン?・・・・・・・・」

「なっちゃん久しぶりだね。」

「・・・・・・・・うん。」

-----本当に驚いた。

「「ママ～」」

ブランコを漕いでいる二人が手を振っているのを、振りかえす。

今度遊ぶ約束が、急遽、すぐに実現したことで子供達はとても嬉しそうだ。

ブランコの側にあるベンチに二人並んで座り、視線は子供達を捉えている。

懐かしい気持ちと戸惑いが入り混じった複雑な距離感。

一体、何から話せばいいのかと頭の中で考える。

そんなことを打ち消すような、

「なっちゃん、びっくりした～?」

-----なんて、あの頃のまんまの、彼女の笑顔にすべてがふっとんでいく。

「もう、驚いた。なんで?」

「色々あってね。・・・・・・・・」

あの後、私も彼女も、会うことがなかった。

結婚して幸せな二人に会う勇気が私にはなかった。

散々、あのときに知らされた過去に、二人の姿を見るのが正直辛いと思ったからだ。

彼女の方も、自分からは私に会おうなんて言えなかったにちがいない。

二人は、今も変わらずに幸せなはずなのに、どうして・・・・・・・・

さっき浮かんだ疑問を訊ねてみることにした。

「ねえ、聞いてもいいのかな？」

「なに？」

「その、旧姓のままだったけど。」

「ああ、私達、別れたのよ。」

それは、あっさりと、明日晴れるかしら？みたいな言い方で、私のほうが驚いている。

「・・・・・・・・別れたって・・・・・・・・」

「あんなに、激的だったのにね？」なんて笑いながら、また子供達に手を振る彼女は少し、たくましくなっている気がした。

「最悪なのよ。」

あの後、結婚して、それなりに幸せに暮らしていたんだという。

しばらくは二人の時間を楽しんで、子供がそろそろ欲しいかなと思っていた矢先に、

「あいつは、他の女（ヒト）とできちゃったの。浮気よ、浮気。で？その結果があつちに子供が

出来たわけ。それで、その結果、頭下げられて、別れたの。」

「えっ、でも。」

私が言おうとすべきことを察した彼女はブランコを競い合いながら漕いでいる二人に視線を

戻しながら、

「そうなの、別れた後すぐに、あの子がいるってわかったんだけど、教えるのも癪じゃない？」

どうせなら私ひとりで育てるわの気持ちよ。それに、言ったところでどうにもならないし。」

「・・・・・・・・ポン、強いね。」

女ひとりで、子供を育てるのは生半可な気持ちでは出来ない。よっぽどの覚悟がないと・・・・・・・・

「言ったでしょ？わたし、気持ちはゆで卵なのよ。ちょっとや、そっとの衝撃では割れないの。」

フツと笑った彼女の顔には力強く、唇の端がキュッと上がってた。

「それに、所詮、あのひとのフラリフラリするところ、変わらなかったというだけ。

可哀想だと思っているでしょ？」

「ん？そんなこと・・・・・・・・」

「大丈夫よ、わたし今、付き合っているヒトいるから。」

「・・・・・・・・そうなんだ。」

「うん、彼ね？まりあのこと、ひっくるめて考えてくれてるの。」

それを聞いてホッとすると同時に、彼女が強くいられるのは

きっと、その彼の存在が大きいんだろうと思えた。

「ねえ？ポン？私も、今は温泉卵くらいには、なれてると思うよ。」

そういうと、お互いに顔を見合わせて笑った。

「あのときに、あんな例えしたけれども、あれから考えてた。卵って色んな料理が出来るでしょ？

形を変えて。」

「うん。」

「だから、あのとき、卵の例えを出したのは、偶然だと自分で思ってたけど・・・・・・・・

卵ってさ、殻を割ったときが勝負のような気がするの。ゆで卵がいちばんだ、みたいな

こと言ったけれど、それは違うんじゃないかなって思えてきて・・・・・・・・。

ゆで卵で終わりじゃなくて、それから手の加えようで、色んなものに、

また形を変えることが出来るでしょ？

自分の決め方で、色んな可能性があるんだと思ったの。」

「・・・・・・・・だね。」

「人生も、そんなふうには、変わることができるって後からの発見ね。それに、あのときは、

感情的になりすぎてたし・・・・・・・・。」

「そうだよ。なぜ、卵??って思ったもん。」

「うん、だから、あの後二人で大笑いしたじゃない。あれは、あのとき、私達には必要だったのよ。」

優しく偽りのようなこと続けても私もなっちゃんも、こうやって笑っていることが
できなかったような気がする。それに、痛い失恋もね。」

「あ・の・ね～、相当ショックだったし、その前も忘れられなくて結構、未練タラタ
ラと

引きずってたのよ？」

「うん、知ってる。私も嘘つき続けるのも嫌だったし、それに、スッキリした
でしょ？」

「・・・・・・・・まあね。あれだけ、言われてしまったら、流石にね。」

「持つべきものは親友だよね。」

「コラッ、調子に乗るな。」

顔を見合わせて、笑いあえてるのも、時間が解決してくれたのと、あのときにすべて
腹を割って

お互いに話せた事がよかったのかもしれない・・・・・・・・。今なら、そう思える。

「ありがとうね。ポン。」

「こちらこそ。これかも宜しくってことでいいの？」

「もちろん。」

どの道を選択すればいいのか、悪いのか、その選択が正しかったのか、間違っていた
のか

それと同じで、卵の殻を割ってから、どうなっているかなんて、わからない。

割った後でも、それから手を加えれば、また違うものに変化する。

「「ママ——！！」」

どこか、お互いの幼い頃に重ねてみえる、手を振る小さな彼女達も、

どんな人生を歩いていくのだろうか。

ブランコを漕ぐ、娘の靴が片方、真っ赤に染められてる空に向かって飛んでいく。

それをみて、私と彼女は笑いながら同時にペンチから立ち上がった。

F I N

23 : 05

end creditsが流れる。

少しほの暗い館内で最後まで座って眺めていた。

映画の半券を左手に握り締めていた。

この映画のチケットを私は、しばらく取って置こうとなんとも思った。

映画の内容が素晴らしいというよりも、今日あった出来事をしばらく忘れそうにないからだ。
。

夢を見てるのかと思った。

よくある、別れのシチュエーションが今わたしの目の前で行われている現実。

そして、その悲劇のヒロインとなるのが、どうやら、この私らしかった。

「----ごめん。別れたい。」

「はあ？」

多分、私はとぼけた声で返事したに違いない。

いつものように待ち合わせて、いつものように、キャラメルラテを注文して、そして今から

どうしようかと計画を、いつものように立てるはずだったのに、

いったい目の前に居るこの人は今なんていったのだろうか、一瞬わからなかった。

もう一度、私は尋ねてみる。

「えっと……今さ、何て言ったかな？」

彼は真っ直ぐに私の瞳をみて、

「-----別れたい。」

はっきりと耳に入ってきた言葉は間違いじゃなかったんだと思うと

これから私は確実に振られるということだった。

ここは、とりあえず、理由を聞いてみないと、分からないからなんて、

まだ、冷静な心の私がいる。

「なんで？」

「……別に、遥は悪くないよ？」

えっ、ちょっと、ちょっと、その台詞は何？

私が何かしたの？

何か悪いことをした設定で別れるっていう感じなの？

まだ、私は彼の別れを分析できるほど冷静だ。

「じゃあ、何で？理由が分からないと私も納得できない。」

あれ？ちょっと、私ってそんな理由がないと動けないひとだったっけ？

心の声が自分に問いかけてくる。

「なんていうのか、その・・・他に好きな人ができた。」

よく、ドラマやなんかである、別れの定番な決定的台詞を自分が聞くとは思わなかった。

好きな人って・・・・・・・・

「好きな人って、誰？私の知っている人？」

そういう私も、お決まりの言葉を彼に投げかけている。

「遥の知らない人だよ。」

「それって、私と別れたいための言い訳っていうか、好きな人も居ないけど別れる理由が

必要だから、そんなこと言っているんだよね？」

自分がすごく嫌な奴、惨めな奴に思えてくる。

こんなに第三者的な自分があることも、冷静な態度でいることができてるのは

きっと、これはまだ、冗談かなにかと思えているからだ。

突然切り出された別れ話に、寝耳に水だった。

確かに、最近擦れ違いが多い気がしていた。

それは、日常の忙しさのせいだと気にも留めていなかった。

少し感じた違和感も、春から社会人になって

お互いに慣れない環境で仕事をしているせいで疲れているのだという、そんなものだ
と想ってた。

お互いに会う時間も、前よりは少なくなっていて、仕事のせいで会えないものだと信
じていた私。

そして、いつ、その好きな人と出会ったのだという腑に落ちない感情が、

胸の奥から煙があがっていくかのように沸き上がってくる。

これは怒りに似た感情に近いものなのかもしれない。

私から移行した彼の愛する感情の行方がもう、その知らない誰かに持っていかれたこ
とに

裏切りにあったような-----

いらなくなったものを捨てられるというような気持ち。

色んな気持ちがマーブル模様のようにグルグルと胸の中で渦巻いている。

「-----その、好きな人ってどこの誰？」

「そんなの聞いてどうすんだよ？」

「知る権利あると思うけど？」

自分で言って心の中で笑ってしまうくらいに、子供じみた言い草かと思えてしまう。

知る権利って・・・・・・・・、別に知らなくてもいいことだと思っているはずなのに、

繋ぎとめることもできないことも、元に戻ることもできないこともわかっているのに、

すんなり別れに同意できるほど、私はそんなに物分りのいい女にもなれそうにもないし

都合のいい女にもなれそうにもない。

簡単に『はい、そうですか。じゃあ別れてあげましょう。』

なんて言えるわけないのだ。

「じゃあ、その人に会わせてよ。」

「なっ、何言ってんだ？」

「本当に、そんなに好きな人がいるっていうんだからひとめ見るだけでいいわ。

そうしたら別れて上げてもいいわ。」

-----ああ、私なに馬鹿なこと言っているだろうと思いつつも、少しだけ彼を最後に

困らせてやることぐらいしてやりたい。

なぜって

それは

女の意地だ。

「-----わかった。」

そう言って、席を立つと、彼の後を追って店を出る。

いつもなら、隣同士を歩いているはずの距離が、今は彼の背中を見ながら歩いている。

きっと、これが最後に二人で歩くことになるんだろうなと思いつつも-----。

別れるとわかっている相手の背中を見ながら歩いている。

右の後ろのほうが寝癖なのか撥ねている。

髪の毛の後ろはあまり気にしないんだなあと思いながら、彼の後を歩く。

今日で、この後姿を着いて行くのも最後なんだと思うと不思議な気持ちだ。

まだ、他人事のように思っている自分がどこかにいる。

突然、彼の足が止まる。

「？」

「・・・・・・・・やっぱ、俺こんなのいやだわ。」

「何が？」

「俺が誰をスキになったっていうのをワザワザ見せに行くみたいのって。」

「いいじゃない別に。これくらい最後のわがまま聞いてくれてもいいんじゃないの？それに

私、そんな暴れたり、泣きじゃくったりして困らせないからさ。」

諦めたように、聞こえるように盛大なため息を吐いて

「-----わかったよ。でも、何もするなよな？」

「はいはい、わかってるって。」

また、歩き出す。

その後を私が歩く。

-----不思議だ。

別れを告げられて、私は最後のわがままだといい、彼の好きな人を見に行くために
こうやって歩いている。

別に、本当に見たいんじゃないかと、すんなり別れてしまうのがすごく嫌なのだ。

こんな時間稼ぎみたいなことをしていても、戻れない関係。

きっと、私が「やり直せない？」なんて言葉出したところで、別れを口に出した時点で、
彼の気持ちは固まっていることくらいわたしにだってわかる。

ピタリと歩みが止まった場所は、ファミレスの前。

「・・・・・・・・ここ。」

「えっ？」

「彼女は、ここでアルバイトしてるんだ。」

「・・・・・・・・そっか。」

彼は最後にウソをつかずに、ちゃんと私の言葉を実行に移してくれた。

それだけで、いいような気がした。

もっと、本当は困らせてやりたいと思っていたはずなのに、別れるときに

サラリと別れることが出来るなんて可笑しいと思っていた。

そんなの、彼のこと好きじゃないみたいだとか、それほどまでに愛しい存在じゃなかったのかと
言われると、そうじゃない。

私の精一杯の最後の彼への、これは愛だ。

-----きっと、そう。

自分でも、その後、その女（ヒト）を見た時の自分の惨めな気持ちが滲み出てくる前のほうが
いいと思った。

ここが潮時だと思う。

別れに綺麗なものは無いというけれど、私の惨めな姿を見せたくないというのが

私なりの最後の意地。

だから、何と言われようが、これでいい。

「-----ねえ？やっぱりイヤ。」

「はあ？」

振り向いて驚いた顔している彼

「-----うん、わかった。本当に好きな人出来たんだってわかったから。うん、ありがと。」

「・・・・・・・・へっ？」

あっ、怒った顔している。怒ったときにするちょっとだけ唇尖らせるの・・・・・・・・。

これを見るのも今日で最後か～・・・・・・・・。

「おい、黙ってないで何か言えよ？いったい何なんだよ？からかってんのか？」

無言で彼のことを見ていたらそうなるよね。でも、何ていうのか

目に焼きつきておきたい気持ちだった。

「・・・・・・・・からかってないよ？ただ、なんていうのか・・・・・・・・最後の我がまま？」

「なんだよそれ。」

「いいじゃん。最後くらい。別に。」

「・・・・・・・・。」

ああ、すごくホッとした顔しているのがわかる。

この言葉を今日、この瞬間に私から言うことになるなんて思いもしなかった。

大きく深呼吸して、息を吐き出すように-----

「・・・・・・・・じゃあ、さようなら。」

「・・・・・・・・おう。」

私は背を向けた。

きっと、今、彼は私の後姿を見ている。

-----そう、普通に歩くの。

気がつかれないように。

いつものように、そう、自然に歩く。

私の最後の意地。

振られたって、どうってことない、痛くもかゆくも何ともないんだから。

きっと涙流して「いやだ。」なんて言葉期待していたら大間違いだっていう。

私なりの強がり。

こんなの、どうってことない。

-----ああ、ドラマみたいに追ってくるわけでもなく、きっと彼の心の中は

修羅場にならなくてよかった、すんなり別れられたていう気持ちなんだろう。

「・・・・・・・・馬鹿みたい。」

きっと彼の心は、既に次の女（ヒト）のことでいっぱいなんだろうと思うと、悲しさよりも

・・・・・・・・なんだろう、このモヤモヤは・・・・・・・・。

このまま家に帰る気持ちじゃない。

友達と会う気持ちでもない。

-----フと目に入ったのは、

今の私の状況とは真逆の壮快アクション映画のポスターだった。

ラブロマンスの欠片もない、筋肉が目につくポスター。

銃撃戦あり、ズドンと爆薬がこれでもか、これでもかっていうくらいに

派手な演出を醸し出すのは想像できる。

それでも、今は・・・・・・・・

(-----ああ、コレを観よう。)

今はコレを観ないと駄目なような気がして、私は吸い込まれるように

映画館の中に足を踏み入れた。

「一枚ですか？」

「はい、一枚。」

チケットを購入してお金を払う。

見ればわかるのに、女ひとり何が悪い。

そんな気持ちで受付の人に心で八つ当たりをする。

チケットを受け取ると、時計を見て開始時間を確認する。

少し時間がありそうだ。

レイトショーを、ひとりで観るのは初めてだった。

周りを見ると、カップルだったり、友達同士だったり・・・・・・・・。

女一人は私だけかと、心で苦笑い。

それでも少し平気でいられる救いなのは、平日の夜ということで混雑はしていないからだ。

そんなことよりも、売店に行って、飲み物を買おうと思った。

いつもなら、ホットコーヒーを買うところを、今日は何故だか、いつもと違うことをしたくなった。

どうせなら、豪快にポップコーンを頬張って、外国の映画みたいに炭酸をグビグビと飲み干すような

感じにやってやろうと、普段は絶対飲まないであろう、メロンソーダをチョイスする。

入り口で、チケットを切ってもらって、半券をポケットに仕舞いこむ。

指定された座席を探し出し、椅子に深々と腰掛ける。

買ってきたポップコーンを早速、口に入れてパサつく口の中を潤すためにメロンソーダを流し込む。

少し照明の光の明るさが落ちてくると、スクリーンに映像が映し出される。

映画の内容は、やっぱり、思い描いたように、主人公の愛する人を助けるために、一人で敵のアジトに

行って、銃撃戦あり、最後は脱出するときのお決まりの爆破シーンという、ありきたりな展開だった。

なぜ、私がこの映画を観ようかと思ったのか、

なぜ、ポップコーンとメロンソーダを選んだのか、

どうして、今日だったのか。

それは、簡単なことだった。

全部、彼が関係していたからだ。

映画はコレを観たいと以前話をしていたのを、なんとなく頭の隅に記憶していたからだ。

ポップコーンは必ず彼と一緒にいくと食べていた。

メロンソーダだってそう-----、彼がいつもそれを飲んでいたので。

いつも、コーラじゃなくて何故それにするの?って訊ねたら、

「わかってないな～、映画にはコレなんだよ。」って変なこだわりがあった。

全部、どこかに彼の影を重ねていた。

いつも、それが当たり前だと思っていたことも、些細なことさえも、すべてが、もう戻らない、

戻れないものだということに気がついたときにジワリジワリと今頃になって私の心の中に
込み上げてくるものがあった。

それに押し出されたかのように、私の頬に伝う涙が、ポロポロと次から次と溢れ出て
止まらない。

幸いなのは、暗くて、私のこんな顔見られないということと、大げさな爆破シーンが
泣きシャックリを消してくれたことだった。

-----23 : 05

end creditsが流れる。

少しほの暗い館内で最後まで座って眺めていた。

もう二度と、

重ならない時間。

重なることのない手。

絡まらない指。

届くことのないため息。

伝わることのない鼓動音。

何度も、何度も思い返してはすべてが、まだ恋しい。

突然、一方通行になってしまって、戸惑っている行き場のない私の想いは

どこかに閉じ込めてしまわないといけないと、無理やり押し込めるかのように

ポケットに入れた映画の半券を出して左手に握り締めた。

それでも、まだ愛（哀）しい気持ちが胸の中に重く押し掛かってくる。

そして、時間がまた経つにつれて、この切ないやるせない気持ちが波のように

押し寄せてくるだろう。

そのたびに、私は今日の映画を観た夜を忘れないだろう。

きっと、この映画のタイトルを聞いたり、観るたびに、この夜の私を思い出すだろう。

そして、あのアクション映画に出ていたあの俳優の筋肉が凄かったとか、あのシーンは

酷すぎるとか、彼への想いとはまったく違ったものに、無理やりにでも変換して、蓋をしていくだろう。

そして何時か、それが思い出になる頃には、私は何か変わっているだろうか。

そう思いながら、映画館を出て、見上げた空に、私が吐いた白い息は、

終わりのない夜の闇に溶けていった。

F I N

